MACF 礼拝説教要旨
2023 年 8 月 6 日
ルカによる福音書 19 章
「祈りの家」

45 それから、イエスは神殿の境内に入り、
そこで商売をしていた人々を追い出し始めて、
46 彼らに言われた。「こう書いてある。
『わたしの家は、祈りの家でなければならない。』
ところが、あなたたちはそれを強盗の巣にした。」
47 毎日、イエスは境内で教えておられた。
祭司長、律法学者、民の指導者たちは、イエスを殺そうと謀ったが、
48 どうすることもできなかった。民衆が皆、
夢中になってイエスの話に聞き入っていたからである。
＊＊＊＊＊＊＊＊
1）商人を追い出す：強盗の巣
イエス様はエルサレムに入城して、まず神殿に向かいました。
そこには商人たちがたくさん店を出しており、特に異邦人たちが入ることを
許された場所が使われていました。
この時代の神殿では、ユダヤ人以外の人の入ることができる場所や、ユダヤ人女性たちの入ることができる場所が、区分けされていました。最も神聖な場所にはユダヤ人・成人・男性・健常者しか入ることが許されませんでした。
そこでなされる祈りはヘブライ語のみです。エルサレム神殿は、非ユダヤ人・子ども・非男性・しょうがい者、さらにはヘブライ語を話さない人にとって、祈りの家ではなかったのです。さらに実態として、経済的に貧しい人も祈りの家に入ることはできませんでした。
商売人たちは、そこで旅人たちから神殿税の両替手数料をとっていました。
そこでのいわば献金はイスラエルの貨幣のシェケルと決まっていたので
どうしても両替が必要でした。
そのうえ、捧げられる動物も高価な値段が付けられていました。
巡礼者たちは、神殿に来て、さまざまなお金をむしり取られるような
感じがしたはずです。
その作業は強盗並みの強奪だったのです。
異邦人たちの礼拝の場を踏み躙り、法外な金品を要求し、礼拝の
心が萎えてしまうような出来事が神殿で行われている状況は
「神の家」にはふさわしくないのです。

2)祈りの家
『わたしの家は、祈りの家でなければならない。』という言葉はイザヤ書 56 章 7 節の
言葉です。

1 主はこう言われる。
正義を守り、恵みの業を行え。
わたしの救いが実現し
わたしの恵みの業が現れるのは間近い。
2 いかに幸いなことか、このように行う人
それを固く守る人の子は。
安息日を守り、それを汚すことのない人
悪事に手をつけないように自戒する人は。
3 主のもとに集って来た異邦人は言うな
主は御自分の民とわたしを区別される、と。
宦官も、言うな
見よ、わたしは枯れ木にすぎない、と。
4 なぜなら、主はこう言われる
宦官が、わたしの安息日を常に守り
わたしの望むことを選び
わたしの契約を固く守るなら
5 わたしは彼らのために、とこしえの名を与え
息子、娘を持つにまさる記念の名を
わたしの家、わたしの城壁に刻む。
その名は決して消し去られることがない。
6 また、主のもとに集って来た異邦人が
主に仕え、主の名を愛し、その僕となり
安息日を守り、それを汚すことなく
わたしの契約を固く守るなら
7 わたしは彼らを聖なるわたしの山に導き
わたしの祈りの家の喜びの祝いに
連なることを許す。
彼らが焼き尽くす献げ物といけにえをささげるなら
わたしの祭壇で、わたしはそれを受け入れる。
わたしの家は、すべての民の祈りの家と呼ばれる。
8 追い散らされたイスラエルを集める方
主なる神は言われる
既に集められた者に、更に加えて集めよう、と。
つまり異邦人を意識して語られている箇所でもあります。
強盗の巣にした商売人は異邦人たちの礼拝を妨げていたことにも
関連があると思います。
神様は人々を差別せず、礼拝者を求めており、祈りの家を大切に
する生き方を求めておられます。

3)神の神殿
「わたしの家は、すべての民の祈りの家と呼ばれる。」
という言葉がありますが、全ての民のための「祈りの家」とは
どういうことなのでしょうか。
決して、そういう建物を作りなさいということではないでしょう。
パウロはこう書きました。
コリントの信徒への手紙二 6:16 (新共同訳)
神の神殿と偶像にどんな一致がありますか。

わたしたちは生ける神の神殿なのです。

神がこう言われているとおりです。

「『わたしは彼らの間に住み、巡り歩く。

そして、彼らの神となり、 彼らはわたしの民となる。

つまり、私たち、それぞれの存在が神の神殿としての役割を託されているのです。

私たちの日常における祈り、神様との交わり、それこそが「祈りの家」としての働きを可能にするのです。

4）イエスを殺そうとする人たち
とても不思議なことですが、この出来事を見て、イエス様を殺そうとしている
人たちが存在していること
がわかります。しかも、それは「神殿」「献金」「売り上げ」を
既得権益のようにして利益を得ていた人たち、
宗教指導者たちでした。
「祭司長、律法学者、民の指導者たち」の多くは神殿に捧げられたお金で生計を立てていましたし、ある意味で「強盗の巣」にしているのを許していた人たちでもありました。
本来、身を慎み、神様の心を分かち合い、神の民としての生き方を指導すべき人たちが
イエス様によって金銭的な利得を妨げられたこと、そして、イエス様が神の言葉を正確にわかちあっていることを目の当たりして、殺意をいだき、亡き者にしようとしているのです。恐ろしいことです。
神殿が強盗の巣になり、神のひとり子を殺す企みを進める場になってしまっている
としたら、なんと悲惨なことでしょう。
さて、教会は、そうなっていないでしょうか？
そして、私たちの心の中に形式的な「教会」を守ろうとしすぎて
イエス様の入り込む余地を亡くしてしまっている、つまり、イエス様の
存在と働きを殺してしまっているようなことはないでしょうか？
＊＊
MACF 礼拝映像はこちらです。
https://youtu.be/LGYisqx4EI4